

現代中央アジアのナショナリズムの諸相:ウズベキスタンの民族・国家の祭典を素材に 帯谷知可(国立民族学博物館地域研究企画交流センター)

ワークショップの 2 日目は、旧ソ連中央アジアを対象として、ポスト社会主義期のナショナリズムと大衆文化・伝統文化との関係をめぐって報告・議論を行った。

本報告ではまず、後続の報告の背景ともなる、ポスト社会主義期の中央アジア諸国のナショナリズムの全般的傾向の整理を試みた。中央アジア諸国のいわゆるタイトル民族を主体とするナショナリズムは、ソ連時代に設定され、すでに 70 年あまりにわたって存在してきた「民族」と「国家」の枠組みを強化する方向に作用し、民族の偉大な遠い過去の強調、脱ロシア・ソ連化、兄弟民族間における自己の差異化、ナショナリズムと愛国主義の領域的一致などの特徴をもつ。

こうした傾向がきわめて顕著に現れているウズベキスタンを例に、「民族独立理念」と名づけられた理念によって再イデオロギー化が進められ、現在のウズベキスタンにとって好ましいウズベク民族の姿やその偉大さが、歴史研究、芸術(絵画・彫刻)、音楽、スポーツなどあらゆるチャンネルを使って表現され、拡大再生産されていることを指摘した。2001 年の大臣会議令「歌謡曲・歌唱芸術のさらなる発展について」にみられるように、多くの例において、大統領令や大臣会議令によって芸術や文化のあるべき方向性が規定されている。同時に、それら文化・学術・芸術活動を担う人々もまた、新しい「市場」に敏感に反応している。

こうした状況が凝縮されているのが、独立記念日やナウルズに首都で閣僚らの列席のもとに催される大コンサートである。それは、プロの音楽家・歌手・舞踊家・俳優、各地方の民族舞踊団、子供たちをも動員して行われ、ウズベキスタンのヒット・チャートをにぎわす人気歌手たちの「祖国の歌」の競演で大団円を迎えるのが通例となっている。独立以来上からのイニシアティブにより続けられてきたこのコンサートは、ポスト社会主義期の国民意識形成の一助となり、新しい国民文化の一部となる可能性をはらんではいない。しかしその一方で、伝統的な儀礼・芸能をそれが根ざしていたはずのコミュニティから引き剥がす結果を生んだり、コンサートに投じられる莫大な費用やコンサートからの大衆の締め出しに対する反発がかいま見えたりと、その可能性を下から支える部分は必ずしも盤石ではないようだ。